



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 補注  |
| Author(s)    |   |
| Citation     | 詞林. 1991, 10, p. 84-89  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/67310">https://doi.org/10.18910/67310</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

補注

「大井河行幸和歌」には忠岑と貫之の序文並びに、是則作以  
外の和歌・漢詩が残っているので、ここに纏めて記しておく。

忠岑の序文（『忠岑集』IVより）

えんぎ七ねん、ていじのみかどの御とき、みゆきせさせた  
まひしわかのそ  
な、つのとし、このつのおきは、よろこびをのぶる十日  
山しろのくに、かどの、こほり、おゝるのかは、むめつよ  
りゆたかにひらきて、よをきこしめしのりのみかど、ひじ  
りのきみあきのゆきをまごしめさんと、みふねどもをなら  
ぶること、くもをあめるいかだのごとし、さすべきさをの  
しげること、なみをかくめるかきに、たり、かつらをれる  
ひとをば、なべておいたるをまわかきをもとめしめたまひ  
はなの心をしれるともがらを、たかきもみじかきもさぶら  
ひしめらひて、かめのをやまに、しきのごふかづけりと  
きく、これをごらんせんとおほせたまひき、よきたきのみ  
づに、くれなるのぬのさらすなり、それをみしめんとした  
まひて、さしのぼるさをのしづく、しぐれにしては、ぬる  
ゝそでかすしらぬもみちにそめ、こぎゆくふねのかげにふ  
きては、のれる人いくえのくもがさはぎて、みづのそらす  
みて、月のかよはんに、なみのせきながらべし、あまつそ

らよりもきよくはれて、ほしのひかり、くものちりもぬざ  
りけん、かゝることを、かぜのつてにてうけたまはる、い  
やしき人はありてたまひしを、まどはらふたとへは、なつ  
のせみのむなしくして、あきのはやしにとまれる、むかし  
のおほせのむねをうけたまはりて、ひるは日ぐらし、むし  
をもとめ、よるはよもすがら、そらのごゑをとゝのへ、し  
づめるときには、山のはに月まつむしうかゞひては、きん  
のごゑにあやまたせ、あるときには、のべのすゞむしをき  
ゝては、たきのみづのおとにあらがはれ、ときはきりのま  
がひ、つゆにぬれしくるゝひは、いづれのとしのあきかし  
らざらん、このことを、ゆめのうちに、くものたよりやま  
づに、あたらふそもしづかならんをりに、ごゑありてまご  
ゆるたいは、このつそのこゝろおなじからず、みなを  
のくかすかぞへて、あはれて、つるすにあそむでは、か  
たのかもめなれたり、すのまつはおいて、きしにのこれる、  
きゝなるはな、わかしる山のためになきて、はかなき  
ごゑたかし、くれなるのは、はやしのほとりにおつれども、  
そのごゑはみそかなり、あきのみづにうかびては、あきの  
山のきもかけをやすむ、たびのかりつもある、いかにそのは  
ねのほごろび、いまははつるゝころに、このひとに、その  
かすにあらずしてのがるゝものならば、ひかりをとくちり  
のかすみに、いとほるゝに、たらん

賈之の序文（『古今著聞集』卷十四・「亭子院御時大堰川行幸

に紀賈之和歌の仮名序を書く事」より）

亭子院御時、昌泰元年九月十一日、大井川に行幸ありて、紀賈之和歌の仮名序かけり。

あはれわが君の御代、なが月のこゝぬかと昨日いひて、のこれる菊見たまはん、またくれぬべきあきをおしみたまはんとて、月のかつらのこなた、春の梅津より御舟よそひて、わたしもりをめして、夕月夜小倉の山のほどり、ゆく水の大井の河辺に御ゆきし給へば、久かたの空には、たなびける雲もなく、みゆきをさぶらひ、ながるゝ水ぞ、そこににごれる塵なくて、おほむ心にぞかなへる。いま御ことのもりしておほせたまふことは、秋の水にうがびては、ながるゝ木葉とあやまたれ、秋の山をみれば、をりひまなき錦ともほえ、もみぢの葉のあらしにちりて、もらぬ雨ときこえ、菊の花の岸にのこれるを、空なる星とおどろき、霜の鶴河辺にたちて雲のおるかとうたがはれ、夕の猿山のかひになきて、人のなみだをおとし、たびの雁雲ちにまどひて玉札と見え、あそぶかめ水にすみて人になれたり。入江の松いく世へぬらん、といふ事をぞよませたまふ。我らみじかき心の、このもかのもとまどひ、つたなきことの葉、吹風の空にみだれつゝ、草のはの露ともに涙おち、岩波と、もによるこぼしき心ぞたちかへる。このことの葉、世のすゑまでのこり、今をむかしにくらべて、後のけふをきかかん人、

あまのたくなわくり返し、しのぶの草のしのばざらめや。

太政大臣 貞信公

藤原小倉山紅葉の色も心あらばいまたびの御幸またなん

入道 躬恒

わびしらにましらなく、きそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

この行幸の年紀并歌仙等の事、かた／＼おぼつかなし。こまかに尋てしるべし。  
（『岩波古典文学大系』）

大井川行幸において作られた漢詩・和歌

※漢詩は、とくに断らない限り後藤論文（13番）【付】参照）

で紹介された、『書苑』十卷九号所収の一葉による。なおこの一葉は春名好重編著『古筆大辞典』の「詩懐紙（藤原行成）」の項に写真が掲げられている。漢詩は「泛秋水」「望秋山」「紅葉落」「菊花残」の順で書写されている。

また、『躬恒集』、『忠岑集』はともに「IV」の本文を使用し、その他の本にも載る場合は番号のみを挙げる）

13 望秋山

千重洞戸懸紅葉 百丈山腰帯白雲

欲趁赤松巖下駐 還愁秋桂動移文

『躬恒集』I・二〇、III・一九八、IV・一三、V・五四

あきやまにのぞむと

けふなればをぐらのやまのもみぢは、よるさへてりてみえわたるらむ

『忠岑集』Ⅱ・八六、Ⅳ・九四

あき山をのぞむ

あきやまのもみぢみしまにひぐれてはたつたひめにや、どはかるらむ

『頼基集』二二

あきのやまに

しらつゆはわきておかじをあきやまになどかもみぢのうらにならむ

#### 14 泛秋水

昨朝北闕見神仙〈重陽侍宴觀霓裳羽衣曲〉 今日西河賞晚煙

不覺心為屋漢客 舟行暗渡水中天

『躬恒集』Ⅲ・一九六、Ⅳ・一一、Ⅴ・五二

亭子のみかどのおほみにおはしませるときにこのつのだいのうた、あきみづにうかべり

このかはにこのはとうきてさしかへりみはけふよりぞみなれそめぬる

『忠岑集』Ⅲ・一〇八、Ⅳ・九三

あきの月にうかぶ

あきふかくうかべるみづのふかければ山をよきてやそこをみるらむ

『頼基集』二二

大井川の行幸に、さまざまのだいどもをよませたましに、みづにうかぶといふだいを

いろ／＼にかけるころもあきのみづもみぢながすとひとやみるらむ

『新拾遺集』卷十八・雜上・一六七〇・紀貫之

延喜七年大る川に行幸の時、序たてまつりて、泛秋水といへる事をよめる

波の上を漕きつつゆけば山近み嵐にちれるこのはとやみん

#### 17 紅葉落

露染霜侵又得風 可憐紅葉滿晴空

飄零岸上都無限 綠水流將晚浪紅

『躬恒集』Ⅰ・二二、Ⅲ・二〇〇、Ⅳ・一五

もみぢおつ

にはのおものからくれなるになるまでにあきにあひかねおつるもみぢか

『躬恒集』Ⅰ・二三、Ⅱ・二三七、Ⅲ・一二二、Ⅳ・四七〇、Ⅴ・五七、九六

風にちるあきのもみぢはのちついにたきのみづこそおとしはてけれ

『頼基集』二三

もみぢゝる

もみぢはのながれうづまくふちをこそくれ行秋のかたみとは  
みめ

『忠岑集』Ⅱ・八八、Ⅲ・一〇七、Ⅳ・九二

もみぢおつ

いろ／＼のこのはおちつむ山ざとはにしきにとめるなまなた  
つらん

19 菊花残

愛菊逆流日漸斜 重陽明日折残花

両三黄菊知何処 応是陶潜浥畔家

『躬恒集』Ⅰ・三九、Ⅲ・二〇二、Ⅳ・一六、Ⅴ・五八

きくこのこれり

きくの花今日をまつとてきのふおきしつゆさへきえすえのさ  
かりなり

『躬恒集』Ⅰ・四〇、Ⅲ・一七、Ⅳ・一三四、Ⅴ・五九

きみがためこゝろもしるくはつしものおきてのこせるきくに  
さりける

『頼基集』二二五

きくのはな

みゆきをばけふとやかかねてきくのはなまきのふのいろのあせで  
のこれる

『忠岑集』Ⅱ・九〇、Ⅲ・一〇六、Ⅳ・九一

きくこのこれり

しもわけてさくべきはなまきものをいろをのこして人をた  
のむる

20

『躬恒集』Ⅰ・四二、Ⅱ・二八〇、Ⅲ・二〇四、Ⅳ・二〇、

Ⅴ・六三

たびのかりゆく

ふるさとおもひやりつゆくかりのたびのこゝろはそらに  
ぞあるらむ

『躬恒集』Ⅳ・二二、Ⅴ・六一

としごとにもひきつらねくるかりをいくたびきぬとどふひ  
とぞなし

『躬恒集』Ⅰ・四三、Ⅱ・一三一、Ⅲ・一一六、Ⅳ・四六五、

Ⅴ・六四

あきごとにたびゆくかりはしらくものみちのなかにや夜をば  
つくさむ

『頼基集』二二四

たびのかり

すむさとほさだめなければたびのかりそらにぞうきてなまわ  
たるなる

『忠岑集』Ⅱ・九一、Ⅲ・一一〇、Ⅳ・九五

たびのかりゆく

むかしよりはるたちかへりあきはきぬいづらをかりのたかひ

といふらん

42 江松老

『拾遺集』卷八・雜上・四五五・紀貫之

おなじ御時、大井に行幸ありて、人人にうたよませさせ給ひけるに

大井河かはべの松に事とはむかかるみゆきやありし昔も

『続古今集』卷十八・雜歌中・一六六一・藤原伊衡

同じ院にしかはにおはしましたりける日、江松老といふことを題にてよみ侍りける

江にふかくとしはへにける松なれどかかるみゆきは今日やみるらん

『躬恒集』I・四八、II・二七六、III・二〇九、IV・二六・

四二三、V・六九

えのまつおひたり

ふかみどりいりえのまつもとしふればかげさへともにおいにけるかな（かな）

『躬恒集』I・四九、III・二二〇、IV・二七、V・七〇

おいにけるまつぞしむあゆかはのみゆきもかくはあらざるけらし

『頼基集』二八

えのまつおひたり

えにふかくとしふる松はみなそのかげにさへこそいろはみ

えけれ

『忠岑集』II・一一八、III・一〇五、IV・九〇

えのまつおひたり

としふかくねざしいりえのまつなればおいのつもりはなみやしるらん

43 鶴立洲

『古今集』卷十七・雜歌上・九一九・紀貫之

法皇にし河におはしましたりける日、つるすにたてりといふことを題にしてよませたまひける

あしたづのたてる河辺を吹く風によせてかへらぬ浪かとぞみる

『躬恒集』I・四一、III・二〇三、IV・一八、V・六〇

つるすにたてり

つるのゐるかたにざりけるしろたへのあまのぬれぎぬほすとみつるは

『躬恒集』IV・一九、V・六一

うらわきて風やふくらむおきつなみおなじところをたちかへりつゝ、

『頼基集』二六

つるかはにたてるを

みづちかみすまひすればやまなづるのながれてちとせありといはるる

『忠岑集』Ⅱ・一二二、Ⅲ・一〇三、Ⅳ・八八

つるすにたてり

まなづるのたちみななせるかたのすにちとせのあとをのこま  
せらめや

44 馴鴝人

『躬恒集』Ⅰ・四六、Ⅲ・二〇七、Ⅳ・三二、Ⅴ・六七

かもめなれたり

なれくらしおきのかもめはつげなくにのちのころをいかで  
しりけむ

『躬恒集』Ⅰ・四九、Ⅲ・二〇八、Ⅳ・二三・四二、

Ⅴ・六八

すにおればいかのうらにまがふとりてにとるばかりなれにけ  
る哉

『頼基集』二七

かもめなれたり

しらなみやみによせかゝるともおもはでたちもさはがずなる  
るとりかな

『忠岑集』Ⅱ・一二四、Ⅲ・一〇四、Ⅳ・八九

かもめなれたり

しらなみのこせどもたえずむれるつつひとになつかんみなれ  
たるとり

45 猿鳴峽

『新撰朗詠集』下・雑・猿・四三三・三善清行

峽裏猿鳴悲又清 況聞薄暮第三声 譚叢

『古今集』卷十五・雑体・俳諧歌・一〇六七・凡河内躬恒

法皇にし河におはしましたりける日、さる山のかひにさ  
けぶといふことを題にてよませたまうける

わびしらにましらななきそあしひきの山のかひあるけふにや

あらぬ

『躬恒集』Ⅰ・四五、Ⅲ・二〇六、Ⅳ・二五、四二二、Ⅴ・六

六

ころあらばみたびてふたびなくこゑをいとわびたる人に  
きかすな

その他、後藤論文では次に挙げた『予寮院臨書手鑑』四六の  
「(伝藤原行成筆)藤原菅根詩写」の詩も「眺望九詠」の中の  
詩ではないが、大井川行幸時の作であると指摘されている。

輪十日未金盈、夜還勝十五。相助照三千世界、更添明。

九詠外有勅、更献詠月詩一首。

别当式部大輔臣藤原朝臣菅根上

秋月為君明 相携共乘晴華山面白 影落水心清 従事高低在

遂人遠近行 巨娥采莫ん挑 太上脱塵纒

元禄七年四月二日模写之